

《軍が森神社》

軍が森（いくさがもり）神社は、平安時代に首藤助六（すどう すけろく）という人物が京都の石清水八幡から分霊し、鎌倉時代に助六の子孫の首藤忠光（すどう ただみつ）が地域の鎮守社としたのが始まりとされています。

その後、南北朝時代に「久米原の戦い」があり、この地で多くの人命が失われたことからこの一帯は「軍が森」と呼ばれるようになりました。忠光の子孫である岸八郎衛門（きし はちろうえもん）が社殿を建て、「軍森八幡宮」としましたが、いつしか「軍が森神社」と呼ぶようになり、村民の崇拝を集めました。

参道の石灯籠には、奈良の春日大社の神の使いとされる鹿が描かれています。



【鳥居】



【本殿】



【玉を抱くこま犬】



【鹿が描かれた石灯籠】

